

1-1 調査の背景と目的

このレポートのめざすこと

CRNA (Child Research Network Asia) では2016年の発足以来、子どものウェルビーイング実現のために、日本を含むアジア 8 か国・地域の研究者とともに様々な活動を行ってきた。そして新型コロナウイルス感染症が世界的な猛威をふるう中で、子どものレジリエンスに着目した調査を開始した。コロナ禍によって通常の社会生活が制限されるような逆境を乗り越えて生きていくためにはもちろん、コロナ禍が落ち着いて以降も、不透明で先が見えない時代を生き抜いていくために、また日々発生する困難や葛藤から立ち直り前進していくためにも、レジリエンスは必要不可欠な力である。CRNAでは一貫して「子どものレジリエンスをどう育むか」をテーマに据えて、研究を実施してきた。

レジリエンスは社会情動的スキル（非認知能力）のひとつであると言われ、その定義には諸説あるが、概念の中核は「困難な状況にもかかわらずうまく適応する力」「逆境や困難があったときに立ち直り、回復する力」である (Masten, 1990; 小塩ほか, 2021)。

まず2021年に、CRNAでは 8 か国・地域の母親を対象とした「子どもの生活に関するアジア 8 か国調査 2021」を実施し、コロナ禍の中で子ども本人のレジリエンスがウェルビーイングに強く関連することを明らかにした。さらに子どものレジリエンスに関連する要素として、保護者や園（保育者）のサポートが重要であることが分かった。

そして継続調査として、各国の園で子どものレジリエンスの育成がどのように行われているのかを明らかにするために、2023年から2024年にかけて、保育者を対象とした「子どものレジリエンスを育む保育実践に関する調査2024」を 8 か国・地域で実施した。その結果、レジリエンスの概念の重要性が認識され、それを育む活動が意識的に実施されている国もあれば、用語への馴染みは薄くともレジリエンスを育む取り組みが実践の中に内在されている国もあった。また同じ国の中でも、保育者によりレジリエンスの概念の理解度やアプローチが多様であることも分かった。

本レポートでは、「子どものレジリエンスを育む保育実践に関する調査2024」の結果を紹介する。日頃、幼児教育・保育現場で子どもたちに向き合っている実践者の方々にはもちろん、家庭や小学校以上の現場でもお役立ていただくための手がかりを提供できれば幸いである。

※レジリエンスの概念についての詳細説明は、p.3に掲載している。

(参考文献)

Masten, A. S., Best, K. M., & Garmezy, N. (1990). Resilience and development: Contributions from the study of children who overcome adversity. *Development and Psychopathology*, 2(4), 425-444. <https://doi.org/10.1017/S0954579400005812>
小塩 真司, 平野 真理, 上野雄己編(2021). レジリエンスの心理学. 金子書房

CRNAとして取り組んできた研究

研究テーマ	子どものレジリエンスをどう育むか	
	2021年	2023-24年
調査名	子どもの生活に関する アジア 8 か国調査2021	子どものレジリエンスを育む保育実践に関する調査2024
調査対象・有効回答数	5 歳（園児）の母親：1,973名 7 歳（小学生）の母親：1,372名	予備調査：園長、主任保育者45名 主調査：主に 4 ～ 6 歳の幼児担当の保育者82名
調査方法	アンケート調査	インタビュー調査
調査時期	2021年 8 月～11月	予備調査：2023年 9 月～10月 主調査：2023年12月～2024年 2 月

本レポートでは、2024年調査の結果を紹介する

※2021年調査の詳細はこちらに掲載している。 <https://www.blog.crn.or.jp/2021crna-research-activities.html>

※本レポートでは、8 か国・地域の共同研究者によるカントリーレポートとケースレポートを参照し、引用、分析などを行っている。





1-2 調査の概要

レジリエンスとは何か

レジリエンスは研究者によって操作的定義が異なり、様々な立場から研究されている。本研究ではレジリエンスを以下の通り定義し、インタビューの途中で下図と共に提示した。

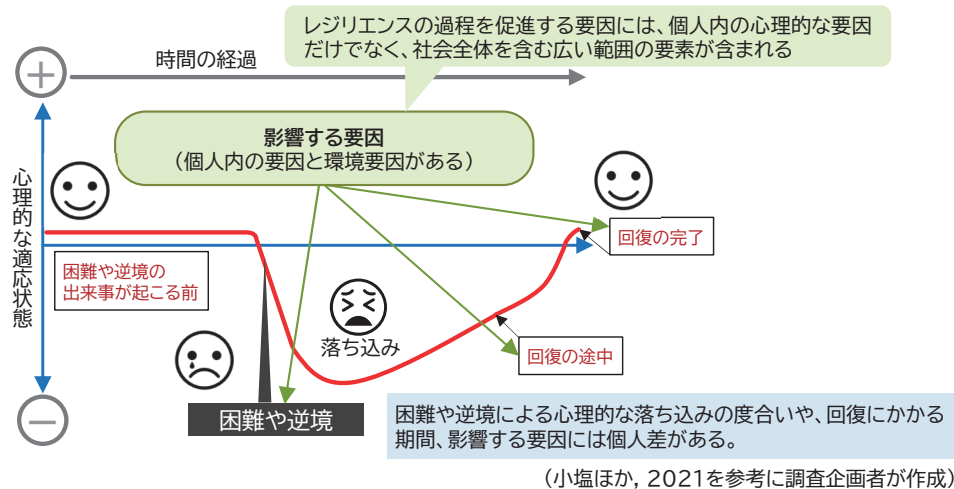
「レジリエンス」のコア概念(Masten, 1990; 小塩ほか, 2021)

- ・困難な状況にもかかわらず、うまく適応する力
- ・逆境や困難があったときに立ち直る力、心の回復力

参考:レジリエンスの概念に関連する社会情動的スキル

感情の制御、セルフコントロール、他者とのかかわり、など

図表1-2-1 レジリエンスのある人の心理的な適応状態の過程(一例)



どんなときに必要な力？

- ・コロナ禍のような逆境を乗り越えて生きていく
- ・不透明で先が見えない時代を生き抜いていく
- ・日々発生する困難や葛藤から立ち直り前進していく

調査概要

調査テーマ	子どものレジリエンスをどう育むか～アジア諸国の保育者の実践から考える～
リサーチ・クエスチョン	1. 保育者は「レジリエンス」「社会情動的スキル」という用語をどのように認知・解釈しているか 2. 保育者は子どものレジリエンスをどのような実践・活動を通して育んでいるか
国・地域	日本、中国、インドネシア、マレーシア、フィリピン、シンガポール、台湾、タイ
調査方法	インタビュー調査（オンラインでの半構造化面接）
調査時期	予備調査：2023年9月～10月 主調査：2023年12月～2024年2月
調査対象	予備調査：園長、主任保育者（各国4～8名、計45名） 主調査：主に4～6歳の幼児を担当する保育者（各国約10名、計82名）
調査項目	予備調査：「レジリエンス」「社会情動的スキル」の用語の認知・解釈／園における「レジリエンス」「社会情動的スキル」を育む実践・活動の実施状況 など 主調査：「レジリエンス」「社会情動的スキル」の用語の認知・解釈／4～6歳児にとっての「困難」「逆境」のとらえ／園におけるレジリエンスを育む実践・活動の実施状況／レジリエンスに関連するシナリオへの対応 など ※シナリオ：レジリエンスに関連する4種類の設定の中から2つ以上を選び、保育者としてどうかかわるかについて回答してもらった。 1) 友達から仲間外れにされた、2) 友達とけんかした、3) 親しい周囲の人が引っ越した、4) 家庭内で辛いことがあった

※「子どものレジリエンスを育む保育実践に関する調査2024」全体では予備調査と主調査を実施したが、本レポートでは主調査の結果を紹介する。

※主調査の対象は「主に4～6歳の幼児を担当する保育者」であったが、国によっては園長などの管理職も含まれている。

1-3 CRNAの紹介&各国・地域の研究代表

Child Research Network Asia (CRNA)について

本研究を実施したCRNAは、チャイルド・リサーチ・ネット（CRN）が運営する、アジア諸国の研究者ネットワークである。「子ども学（Child Science）」の視点から、アジアの子どもを取り巻く社会課題の解決に向けた研究活動に取り組んでいる。日本、中国、インドネシア、マレーシア、フィリピン、シンガポール、台湾、タイの8か国・地域で構成されている。

CRNAを構成するメンバーのうち、本研究の代表および各国・地域代表を以下に紹介する。

本研究の代表



榎原 洋一（日本）

お茶の水女子大学名誉教授。CRN所長。ベネッセ教育総合研究所常任顧問。日本子ども学会理事長。専門は小児神経学、発達神経学、特に注意欠陥多動性障害、アスペルガー症候群などの発達障害の臨床と脳科学。

本研究における各国・地域代表



佐藤 朝美 （日本）

愛知淑徳大学教授。専門は教育工学、幼児教育、家族内コミュニケーション、学習環境デザインに関わる研究。



Thelma Mingoa （フィリピン）

フィリピン・デ・ラ・サール大学助教授。専門分野は、特別支援教育、ギフト教育、幼児教育。



周 念麗 （中国）

中国・華東師範大学教授。研究領域は児童発達心理、親子関係、0-3歳児の多元知能の測定と育成方案。



Christine Chen （シンガポール）

シンガポール幼児教育者学会（AECES）代表。30年以上にわたり、子どもや家族のウェルビーイング向上のために、保育者の能力開発に従事。



Sofia Hartati （インドネシア）

ジャカルタ国立大学教育学部教授。幼児教育の講師、幼児期のソーシャルスキル・スペクトラムの研究者。



洪 福財 （台湾）

台北教育大学教授。主な研究・教育分野は台湾のECEC政策と労働システム。幼児教育の専門家のウェルビーイングなどに注目。



Mazlina Che Mustafa （マレーシア）

スルタン・イドリス教育大学（SIEU）准教授。研究分野は、子どものウェルビーイング、質の高い幼児教育（ECCE）、子どもの発達など。



Sasilak Khayankij （タイ）

タイ・チュラロンコン大学准教授。専門分野は、両親教育、特別支援教育、美的経験、幼児の評価など。

※研究代表を務める日本を先頭に、中国以下は国名のアルファベット順で掲載。



1-4 回答者の属性

各国・地域の回答者の属性

(人)

	回答者	役職			経験年数		園種			特記事項
		保育者 (担任)	管理職 (園長、 マネージャー など)	その他	10年 未満	10年 以上	公立	私立	その他	
日本	11	11	0	0	5	6	7	3	1	園種「その他」は国立園。 私立2園はインクルーシブ保育実践園
中国	10	5	5	0	2	8	9	1	0	
インドネシア	9	4	5	0	3	6	2	4	3	園種「その他」は宗教園
マレーシア	7	7	0	0	0	7	2	4	1	園種「その他」は宗教園
フィリピン	15	15	0	0	8	7	5	10	0	
シンガポール	9	6	3	0	2	7	5	4	0	
台湾	10	10	0	0	2	8	6	4	0	3園はモンテッソーリ導入園
タイ	11	5	2	4	2	8	4	7	0	役職「その他」は特別活動(遊び)教師、 体育教師など

※「子どものレジリエンスを育む保育実践に関する調査2024」全体では予備調査と主調査を実施したが、本レポートでは主調査の結果を紹介する。

※上記の表では、主調査の回答者の属性を示している。

※各国の研究者には「主に4～6歳の幼児を担当する保育者」へのインタビューを依頼したが、国によっては回答者の中に園長などの管理職も含まれている。

※中国では、すべてのケーススタディを地方都市の園にて実施。

※タイでは、ヴァルドルフ＝シュタイナー教育、モンテッソーリ教育、ハイスコープ、プロジェクトアプローチなどを導入している私立園、先導的／ベストプラクティス実践園である公立保育園にて調査を実施。

回答者に関する留意点

- 本研究ではケーススタディ法を使用した。
- 対象の保育施設は、各国の代表研究者によるスノーボール式サンプリングで選定した。
- 各国の研究者には、公立や私立、幼稚園や保育所、宗教ベースの施設など、各国で運営されている多様な園種を対象としたインタビューの実施を依頼した。